

平成 30 年 5 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26360010

研究課題名(和文) オーストラリアにおける歴史博物館の発達 20世紀最大の草の根運動

研究課題名(英文) Development of historical museums in Australia

研究代表者

藤川 隆男 (FUJIKAWA, TAKAO)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：70199305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀最大の文化運動と言われたオーストラリアの地方の歴史博物館の発達と現状を調査することを主要な目的とする研究であり、研究機関中6州2準州を訪れ、資料の他、150以上の博物館に関する26000枚以上の画像を入手し、その多様な様相を明らかにした。これに付随して、博物館をめぐる歴史戦争の問題、博物館の持続性の問題、オーストラリアにおける博物館全体の歴史の変遷なども跡付けた。複数の論文により研究内容は紹介しているが、資料の整理と全体像の書物としての公開は、今後の課題として残っている。

研究成果の概要(英文)：This study deals with the present condition and historical development of local historical museums in Australia, which was regarded as one of the most unexpected and vigorous cultural movements in Australia in the 20th century. During the period of research I visited 6 states and 2 territories and collected 26000 images besides paper documents. Through those data I showed their diversity and resilience. In connection with the major theme I explained 'history war' over the National Museum in Australia and an overall picture of Australian museums and their historical development. Although I published such results in journal articles, I still need some time to categorize all the records and to publish the final results in a book.

研究分野：オーストラリア史

キーワード：博物館 歴史戦争 歴史教育 パブリック・ヒストリー 地域 記憶 歴史協会 ナショナル・トラスト

1. 研究開始当初の背景

歴史研究やカルチュラル・スタディーズの分野で、博物館に研究の焦点が当てられてこなかったわけではない。博物館は、ピエール・ノラの『記憶の場』を引用するまでもなく、近代国家にとっての集合的記憶の場として、きわめて重要な位置づけを与えられてきた。また、ベネディクト・アンダーソンも『想像の共同体』の増補版では、とくに章を設けて博物館が国民国家形成のための権力装置として機能したことを示している。日本でも科学研究費の補助を受けた、溝上智恵子「戦争記憶の表象モデル構築に関する研究:戦争博物館展示の政治学的分析」(2006 - 2008)は同じような問題意識を共有している。溝上に限らず、アンダーソンやエリック・ホブズボームなどの影響もあり、日本の研究者は、博物館を国民国家形成やナショナリズムとの関連で論じる傾向が圧倒的に強い。こうした研究は、想像の共同体論の補完的研究として、あるいは戦争の記憶の問題を強調する研究として、重要であることは言を俟たない。しかし、それだけで十分なのだろうか。本研究は、オーストラリアの歴史博物館を対象として、従来の博物館像とは異なる歴史像を描き出す。

2. 研究の目的

オーストラリアでは、1950年代末から15年ほどの間に1000もの歴史博物館が創設された。これらの博物館は、政府の援助を受けずに、草の根の文化運動によって生まれた。従来こうした博物館は、歴史家や博物館学者によって無視されるか、半ば嘲笑的に語られてきた。しかし、現在、その数は2000館あるともいわれるほどに拡大している。こうした歴史博物館の半世紀にわたる歴史的变化とその担い手たち、さらにその多様性と地域的特性を研究することで、歴史学の外で自律的に展開してきた歴史的な知識や意識の創造の場を明らかにする。

3. 研究の方法

歴史博物館に関する時間的、地域的、類型的な特徴をまず把握するために、それぞれ次のような方法を用いる。(ア)時間的变化を把握するために1975年の『ピゴット報告書』のもとになった調査資料を利用し、その対象になった博物館の状況を把握、さらに現在の博物館の状況と対比して、時間軸の原型を作る。(イ)地域的の差違を理解するために、各州の調査資料を渉猟すると同時に、州ごとに博物館の調査を行う。(ウ)一般的な類型を完成させるために、海事博物館、軍事博物館など未調査の博物館を調査対象とする。(エ)地域のアイデンティティと歴史意識については、地方都市を取り上げて、その博物館と都市の歴史を分析する。(オ)広く博物館の問題を検討するために、オーストラリアの歴史戦争について再検討する。

4. 研究成果

(1)オーストラリアの博物館は、きわめて大まかに言うと、三層構造を成している。第1層は、連邦政府が運営する国立博物館。第2層は、これよりもはるかに歴史が古く、植民地政府(1901年の連邦形成以前)から引き継がれた州立博物館。第3層は、地方の自治体の、あるいは非公営の地方博物館である。ところで、「何を博物館と呼ぶか」という問いに対する明確な答えはない。したがって、オーストラリアにある博物館の総数もはっきりとはわからない。オーストラリア統計局によると、2008年末に、博物館とギャラリーを運営している組織は1184あり、1456か所で活動していた。しかし、この数字は明らかに過小評価であり、少なくとも2000館と述べる研究者もいれば、3000館以上あると見積もる者もいる。

(2)オーストラリアの地方の歴史博物館は、1950年代末から急激に増加し、1000館以上に達し、「今世紀のオーストラリアにおける最も活発で予想外の文化運動」とさえ呼ばれるようになった。その後もその数は増加し、現在では総数が2000館とも3000館ともいわれている。『ピゴット報告書』のもとになったコンサルタントのレポートを利用して、そこに現れる94館の経年的変化を検証した結果と、ヴィクトリア州の博物館の総合調査などと較べながら、歴史的な全体像を描くと次のようになる。

地方の歴史博物館の最大の担い手は歴史協会であり、ナショナル・トラスト、地方自治体などがこれに次いで重要である。こうした博物館の維持と発展にとって、歴史協会の「高齢化し、減少する参加者」が常に問題とされてきたが、歴史協会の博物館は、閉館することは極めてまれで、長期にわたって安定的に維持されており、新しい歴史協会の設立にともなって、博物館数も増加してきた。その背景には、ヴォランティアの活用によって運営費用を最小限に維持し、その費用を自己資金で賄ってきたという土台があった。高齢化という問題は、老人から老人へという老・老の世代交代によって、多くの歴史協会はメンバーの数を維持し、しかも活動のレベルも向上させてきたことで回避された。さらに、地方自治体による施設の貸与やIT化の進展も歴史協会の博物館にとっては有利に働いている。

ナショナル・トラストの博物館は、その強固な組織的・財政的基盤から安定した運営が予想されるが、検証の結果もその通りであった。ただし例外的に先住民への施設の返還が見られた。地方自治体が運営する博物館は、組織的基盤に関しては安定しているように思われるが、政治的な変化や財政上の問題から、40年のスパンを取ると現実に閉館されるものも多かった。これは地方自治体が深く関与し、連邦政府・州政府から多額の財政的援

助を受けた大規模な屋外博物館についてもいえることである。こうした大規模施設は、運営費用も巨額で、経営危機にも陥りやすく、安定した基盤を持たないといえる。このほか、個人が所有する博物館はかなり大きな割合を占めるが、40年というタイムスパンを取ると、その多くが閉鎖されている。しかし、現在も個人のコレクションが博物館として公開されている例は多く、生まれては消えていく、新陳代謝を繰り返しているといえよう。

(3) オーストラリアの地方の歴史博物館はきわめて多様である。一般的な歴史を扱う博物館、先住民のカルチュラル・プレイスやセンター、中国人やユダヤ人などを対象とするエスニック博物館、海洋の歴史を扱う海洋博物館、戦争に特化した戦争博物館など各種の博物館がある。この他、特定のテーマに特化した、鉄道や馬車、自動車、飛行機、農機具、フライングドクター・サーヴィス、ミッション、カントリー・ミュージックなどの博物館もあり、それをひとくくりにして論じるのは、あまりに抽象化が過ぎるように思われる。一部の歴史博物館を見て、驚異の部屋のように見える奇妙な記憶の宮殿だとするクリス・ヒーリーのような批判は的外れだと思われる。本報告書では、個別の博物館の多様性について述べることはできないが、現在準備中の書物の中で、これについては詳しく論じるつもりである。

(4) 国立博物館は歴史戦争の舞台となった。博物館への露骨な政治的介入は、自由な市民文化にとってきわめて有害である。しかし、様々な見方や解釈が提示され、対話を行うフォーラムという新しい博物館の特徴は、歴史戦争を招き入れる側面も有していた。オーストラリア国立博物館長のドーン・ケイシーは、これを歓迎すると述べたが、最終的には、多くの博物館で挑戦的な展示を控える自己規制を生み出した。また、先住民と対等の立場で、協議に基づいて展示をするという考え方は、先住民の主体性を承認し、これまで無視されてきた価値観に光を当てることに成功した。しかし、博物館の展示が先住民との協議に基づいて変更されるとすれば、国民を代表する政治権力が展示への介入を行おうとしたときに、博物館が専門性を根拠にこれを拒否するのは容易ではない。現在の国立博物館では、先住民に関する政治的側面の展示は控えめであるといえる。

地方の歴史博物館では、決して先住民の展示が無視されているわけではない。奪われた世代の歴史や侵略の歴史を積極的に取り上げているものもある。しかし、全般的に言うと、先住民に関する展示は形ばかりのものが多くという傾向がある。けっして差別的ではないが、積極的でもない地方の博物館は多い。

(5) 歴史的建物や遺構を中心として、博物館として認定されている場所も多い。とりわけ世界文化遺産関連には、そうした施設の中でも大規模なものが多いように思われる。代

表的なものとしては、タスマニアのポートアーサー監獄跡があげられるが、そのほかにも同じくホバートにある女性刑務所跡地やウールマーズの牧場など特色ある施設も存在する。こうした施設には、関連する史料の展示だけでなく、新たに作られた美術品の展示なども見られて、日本にとっても参考になるように思われる。

(6) 地域と博物館の関連については、すでにガンダガイについては言及しているが、詳しい研究成果をまとめ上げられていない状況である。今後出版する本の中で、さらに詳しく述べたいと考えている。最後に、ガンダガイの例について簡単に述べておく。

約2000人のNSWの町、ガンダガイでは1956年に町のロータリー・クラブの会合で、博物館の創設が話題となり、開拓者たちの功績を明らかにするために歴史協会を設立し、それを担い手として博物館を立ち上げようという提案があった。1963年には、同じNSWのダボウの博物館の設立などが伝わると、王立歴史協会の支部が設立され、歴史博物館の開設を目指すことになる。「観光の大きな目玉になる」ことを掲げて、まず資料の保存と提供が呼びかけられた。博物館の土地と建物が町から提供され、エイベックス・クラブが協力を申し出た。歴史協会の会長オスカー・ベルは、このとき「ガンダガイと周辺のあらゆる住民から何かを集め、すべての住民が代表されることを願っている。国民の歴史はその記憶にあると言われるが、町の歴史は生き続ける必要があるし、その遺物は子孫に残さなければならない」と述べている。さらに1852年の洪水の際に町を救った先住民の少年ヤリーの銅像やカヌーの作成、それが観光客の誘致にもつながることなどにも言及した。1965年のイースターに博物館が開館し、7月には協会の会員数が471人に達した。入場者は2年目には年間5000人を超え、大きな成功を収めた。

1970年には、キャプテンクックの上陸200年記念の際に州政府から得た補助金で、博物館が拡張され、1980年になると、自己資金に州政府の補助金を加えて、新しい建物の建築に乗り出した。しかし、博物館の創設に尽力した歴史協会の会長ベルが亡くなると、活動は停滞し、1990年までには活動する歴史協会の会員が4人となり、博物館も閉鎖の危機に見舞われた。こうした状況が知れ渡ると、これを支援する運動が1991年から始まり、再び博物館の運営に参加する人びとが増加するようになった。

ガンダガイ歴史博物館は、地域のパイオニアを顕彰すること、幹線道路であるヒュームハイウェイが町を迂回する事態に、観光を誘致することを狙って建設された。また、ダボウなどの他の地方の町への対抗意識もあった。しかし、「あらゆる住民から何かを集め、すべての住民が代表される」という、主要都市の博物館では見られない独自の目的も持

っていた。こうした目的があったからこそ、現在まで博物館は続いているのである。ガンダガイの博物館の例は、けっして特殊なものではなく、オーストラリアのいたるところで見られると言ってよい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 藤川隆男、'Chinese Museums in Australia: characteristics and problems' 『パブリック・ヒストリー』15号、2018年、44 - 50 頁、査読なし
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/68030/ph_15_044.pdf

(2) アンナ・クラーク、藤川隆男「パブリック・ヒストリー 社会の歴史意識・知識とアカデミックな歴史」『西洋史学』263号、2017年、36 - 48 頁、査読あり

(3) 藤川隆男「乾燥大陸オーストラリアの歴史と開発」『Civil Engineering Consultant』査読なし、274号、2016、10 - 12 頁

(4) 藤川隆男「オーストラリアにおける地方の歴史博物館の変遷」『待兼山論叢』査読なし、49号、2015年、1 - 26 頁

(5) 藤川隆男「オーストラリアにおける歴史教育の統一的・全国的カリキュラムの導入」『パブリック・ヒストリー』査読あり、12号、2015、15 - 28 頁、
https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/66536/ph_12_015.pdf

〔学会発表〕(計2件)

(1) 藤川隆男、Chinese Museums in Australia: characteristics and problems, The Third International Workshop on Australia in Osaka2016 (国際学会)、2016年

(2) 藤川隆男「『南の虹のルーシー』から移民博物館へ 2世紀にわたるオーストラリア」「イギリス帝国と移民 太平洋を中心に」シンポジウム(招待講演)、2014年

〔図書〕(計3件)

(1) 橋本伸也、藤川隆男、平野千賀子他、『紛争化させられる過去』岩波書店、2018年、109 - 130 頁

(2) 歴史学研究会、清水光明、藤川隆男他、『歴史を社会に活かす』東京大学出版局、2017年、39 - 49 頁

(3) 藤川隆男『妖獣バニヤップの歴史ーオーストラリア先住民と白人侵略者のあいだで』刀水書房、2016年、298 頁(内容の一部)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤川 隆男(FUJIKAWA, Takao)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 70199305

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()